芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 40　53. 11

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・浅　田　弘　明

第14回県芸術祭におもう

大分県芸術文化振興会議副会長　宮　崎　　豊

本年度は先ず開幕行事として、創作日本舞踊が豪華絢爛たる日本の美しさを十分観客に満喫させたことに始まり、閉幕行事として県民吹奏楽できちっとまとめ上げようという、其間に、文芸、美術、音楽、演劇等々の参加行事がひしめきあっています。それに特別参加行事として浮世絵展、糸園和三郎展、北原人形芝居なども加わり、例年にない行事数を見せておることは誠に喜ばしいことであります。

このように文化活動が盛大に向って行くことは、県民全ての人々にとって、幸せなことだと言わねばなりません。

こうした中で、特に最近注目したいことは、創作作品による行事の多いことだと思います。創作と言うことは、芸術にとって欠かすことの出来ない大きな要素の一つであります。しかし実際表現活動の上で真の創作と言うことは容易なことではありません。

大体歴史や時の流れの中におし流されて既製作品の繰り返しとか再演に終わってしまうものであります。

そうした中にあって、創作オペラ「吉四六昇天」は地方に密着し、古里の血の通った作品であり、何回見ても心のおどるのを禁じ得ません。今年は又日本で初めてのジュニアオペラ「あまんじゃくとうりこひめ」なども上演され、オペラ界にとっても新機軸であり、これが最初に大分で試みられたことは、日本的にみても偉大なる躍進と言うべきでしょう。

さて、これらの中にあって、私の最も関心をよせているのが中沢とおる氏による創作演劇の次から次の発表であります。

弾　く　人

県立芸短大教授
独立美術協会員　広　瀬　通　秀

「沈んだ島の物語」「大友宗麟」「宇佐邪馬台国女王卑弥呼」「蘭学事始、前野良沢伝、扉を開く人たち」と矢継ぎ早の発表公演には唯々驚くばかりです。

1年、2年と時を重ねなければ出来ないような大作を毎年発表してゆくその芸術に対する熱情と強い意欲には、唯々敬服するばかりです。

今年は又々「白秋を恋した女」江口章子の伝記の創作劇を拝見しまして、演劇とは人の世のありし出来事をかくも強力に情熱的に表現出来るものかと、今更ながら驚き、感激したのであります。私は創作と言うものの尊さを、そして創作なるが故の感動を身にしみて感じたのであります。

その他地方の市町村に於ける参加行事としての文化活動も年々隆盛に向かいつつあることは何とも嬉しいことであります。

去年私は、日出公民館に行き、つぶさにその活動状況を見て来まして、私も以前勤務していた土地ではあるし、あの当時と比べると、全く隔世の感深いものがありました。

又竹田市の総合文化祭には、幾度かまいったのですが、第32回と会を重ねた滝廉太郎記念音楽祭と第30回ともなった、画聖竹田美術祭とを中心として、又その上去年、市文化会館落成もあって、文化活動の隆盛は誠に賞讃すべきことだと思います。

その他の地方もこれら以上に活動している所もあろうと思いますが、より以上文化発展の為に御努力されんことを祈って止みません。

松方コレクションを中心とした
国立西洋美術館名品展によせて

県立芸術会館学芸第一課長　芦　刈　政　治

㈠

芸術会館も満１歳を迎えた。関係者の間で会館の誕生を祝うため、どんな記念展を催せばよいかが話題となった。

昭和41年11月、大分で開催された松方展は、観覧者15万7,000人に深い感動を与えた。「大分に美術館を」という声がこれを機にして高くなり、その益金の一部は、美術館建設の基金となった。芸術会館の胎動は、これから始まった。

松方コレクション展は、芸術会館にとって、最も記念すべき展覧会である。開館１周年記念展は、松方コレクション展にしようという結論が出たのは、当然の成り行きであった。

しかし、２番煎じにしたくないというのが、関係者の気持でもあった。だから、今回の出品作品数は、前回の作品を含めて、２倍ぐらいの規模にという構想がたてられた。

㈡

ご承知の向きも多いと思うが、松方コレクションについて触れておきたい。

明治の元老松方正義は、明治24年（1891）以降、二度にわたって内閣総理大臣となった人物である。明治元年（1868）、大久保利通にその才幹を認められ、豊後国日田県知事として赴任した。在任期間は２か年であったが、明治初期の地方政治の確立に尽すところが大きかった。

その間、田能村竹田に私淑し、麗筆を揮った平野五岳と親交を結んだ。松方家の所蔵した五岳筆「竹林幽居図」などの数々の秀作は、このころ求められたのであろう。

三男松方幸次郎は、明治２年（1869）の生まれであるから、父正義の日田在任中に出生したことになる。「竹林幽居図」等の収蔵が示すように、幼いころから美術品に囲まれて成長したともいえる。

かれは、大正７年（1918）、第一次世界大戦の戦火の中にあったパリを訪れて、絵画・彫刻の収集につとめた。当時、川崎造船会社の社長を勤めて巨大な財力をもっていたこと、インフレーションや戦乱によって、美術品を手放す所蔵者が多かったことなどが、そのコレクションを豊富にした。

昭和２年（1927）までに収集されたコレクションは、日本・イギリス・フランスに三分されて保管された。日本に帰った分は、経済恐慌のために処分、在英コレクションは焼失、在仏コレクションは、第二次世界大戦中、難を避けてパリからノルマンディーに疎開されたのち、敵国財産として連合国に接収され、フランス政府に帰属してしまった。

昭和26年（1951）、首相吉田茂は、サンフランシスコ平和条約調印のおり、フランスに松方コレクション約400点の返還を申し入れた。これは、ようやく独立した日本の権利の主張であった。これをきっかけに、昭和33年（1958）ド・ゴール大統領は、同コレクションを保存する美術館設置を条件に、日本政府に返還することを決めた。日本では昭和34年（1959）、これを受け入れる美術館として、国立西洋美術館の新設をみるにいたった。

㈢

つぎに、松方コレクションを中心とした国立西洋美術館名品展出品作品のごく一部分を、美術史風にかいつまんで紹介しよう。

19世紀中ごろの西欧美術界は、ロマン主義から写実主義に向い始める。この背後には、産業革命後の科学的な実証主義の思潮があった。絵画の写実主義的な動向は、古くから認められるが、実証主義の思潮の洗礼を受けたクールベによって、真に絵画になり得たといっても過言ではない。本展出品の巨大なエネルギーを表現する「波」（写真・本展陳列作品）や、うるおいの肌を感じさせる「もの思うジプシー女」（本展陳列作品）は、見る者に確固たる存在感

ゴーガン作「ブルターニュの少女」

を感じさせる。

19世紀の後半になると、マネを中心としたモネ・ピサロ・ルノアール・セザンヌ（本展出品作家）のような青年画家たちは、アトリエの中で制作するクールベたちの表現手法と異なって、太陽の直射の下の、光による自然の表情を求めて制作を始めた。この傾向は、印象主義として一般化して行った。その背景に、1年あまり続いた独仏戦争からコンミューンの乱にいたる戦乱を避けて、画家たちがパリから地方に逃れ、明るい風光に接したという事情があった。

今回出品のモネの作品「舟遊び」は、貴婦人ののどかな舟遊びを描いている。水面に輝く多彩な光の変化や貴婦人の軽やかな白衣の影の部分が、紫色に沈んでいるところを捉えた色彩感覚は、外光派の旗手の名にそむかない。

印象派の画家たちは、徹底的に外光の効果を追求した。このことによって、絵画のもつ基本的な要素である線・形・構図と、描かれる対象の担うべき観念を表現することがややもすれば軽視されることになった。

ゴーガンは、イギリス海峡につき出ている半島の寒村にたたずむ「ブルターニュの少女」（写真）を描いた。おびえるようなまなざしが、見る者に訴えかける。幅広の単純な平塗りで表現された粗末な衣服や、ディフォルメされた大きな足は、少女の表情とあいまって、心の内奥や生活背景を推測させるのに十分である。

この作品が示すように、ゴーガンは、かれの作品を通じて、官学派の客観描写や、印象派の視覚偏重に反対し、日本の浮世絵からの影響を受けながら、主観的な画境を主張した。

20世紀になると、フランスの美術界に過去のあらゆる伝

オーミエール作「美しかりしオーミエール」

クールベ作　「波」

習を否定する荒々しい運動が起こった。フォーヴィズム（野獣主義）である。したがって、印象派の作品も、きれいごととして抹殺され、激しいタッチで描かれた単純化されたフォルムと原色的色調をもつ画面を生んだ。

松方コレクションには、この時期の作品が少ないが、それでも、フォーヴ作家の中心的存在であったマルケの「坐る裸婦」やヴァン・ドンゲンの「ターバンの女」が本展に出品されている。

松方コレクションは、おおざっぱにいえば、2つの柱によって支えられている。

1つは印象派を中心とする作品群と、いまひとつはロダンの作品群である。

ロダンは、平凡で、形式的に堕している西欧彫刻界に生命を吹き込んだ。かれの造形表現は、徹底的な写実的追究を果たした「鼻の潰れた男」（本展陳列作品）から、写実にもとづきながらも、古典的彫刻表現を復活させた「青銅時代」（本展陳列作品）へと進んだ。

ロダン彫刻の圧巻は、この写実に満足せず、人間の内部にある激しい情熱を表現したところにある。「接吻」（本展陳列作品）は、その最たる作品であろう。しかし、かつては、みずみずしく豊麗であったオーミエールを、「美しかりしオーミエール」（写真・本展陳列作品）として、老いさらばえた姿に彫り上げたのは、ロダンの、人生に対する深い哀愁を示すものに思えてならない。

(四)

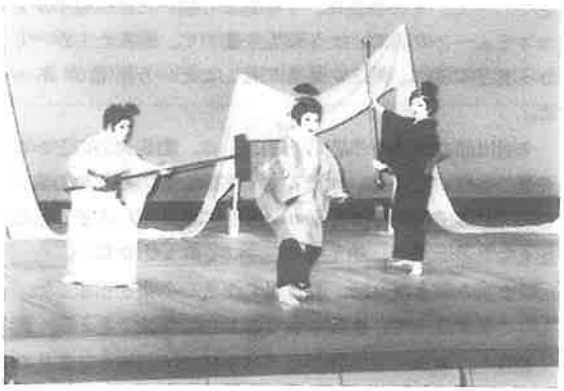
この展覧会は、国立西洋美術館の巡回展である。毎年1か所に限って巡回されるが、本年は、特別なはからいによって、大分県に貸与されることになった。

しかも、同館の増築によって、常設展示が拡大されるから、これだけの高い水準で、しかも、幅広い作品を鑑賞できるのは、大分展が最後であろうといわれている。

そのうえ、国立西洋美術館のご好意で、同館購入の名品を加えることができた。より多くの県民が鑑賞されることをお願いしたい。

県芸術祭『開幕公演』と取り組んで

県日本舞踊連盟理事長　花　柳　有句秀



開幕行事「日本舞踊創作の会」から「車」・「西遊記」

県芸術祭開幕行事の記念公演を立派に果たすことが、県日本舞踊連盟の宿願でありましたが、お蔭様で10月１日、無事その大任を全うすることができました。

県日舞連盟の結成以来の大事業であったことも事実ですが、事業終了までの間、たくさんの難問が前面に立ちふさがっており、この壁を一つ一つのりこえていくことは、社会的な実務面で何かと不なれな私どもとしては大変努力を要することでした。

最初の大きな課題は、公演の内容をどのようにするか、ということでした。

「何か郷土に関わりのあるものを」と話し合ったこともありましたが、作詞・作曲にともなう諸経費の点でまずダウン。それでは古典ではどうかということで、たとえば「六歌仙」はどうかと検討したのですが、構成上の点で行き詰りました。

結局、お客様の立場になってみて分り易いもので、そしてドラマ性をもち、スピーディなものがよいということになりました。

右のような経過があって、ようやく創作舞踊「西遊記」「車」（振付・指導花柳芳次郎）、古典をふまえた「蝶の夢」（振付・指導藤間章作）を公演することになりました。

「西遊記」「車」は現代感覚を基調にした動きのはげしいもので、その中で日本舞踊としての「型」を求める演出については、時には私たちを惑わせるほどの新鮮さを与えてくれました。

一方、「蝶の夢」は、長唄・清元・常磐津の名曲を底幾とした、しかも歌舞伎所作の本筋であるだけに技術面でもきわめて高度の表現を要求されました。

出演者は、何れも日本舞踊の専門家ですし、大部分の人はこれを職業とする人たちですが、初心にかえり酷暑の中のきびしい稽古にたえてきました。今にして思いますと、ともに手を携えての稽古は、その時は辛くとも、あとになってみるとまことにすがすがしいものがございます。

お蔭様で、昼の部、夜の部ともにたくさんのお客様方に楽しんで頂くことができたと存じております。

日本舞踊がわが国の伝統芸能の中で特にすぐれたものでありながら、日本舞踊に対する一般の皆様の認識はまだ充分とは思えません。

「日舞は難しい」「日舞はお金がかかる」等々。

この言葉はあたっている部分もありますし、もう少し御理解を頂きたい部分もございます。

何れにせよ、私どもの日舞普及への努力がまだ本物でないのかもしれません。

これからの私ども県日舞連盟の課題の一つは、県民の皆様に日本舞踊を普及定着させる努力と申せます。

その意味で、今回の開幕行事という機会を与えて下さった主催者ならびに県芸術祭運営協議会に深く感謝しています。同時にこれからの県日舞連盟としての責任の重さといったものもつよく感じています。

先日、東京で全日本吹奏楽連盟四〇周年記念式典のレセプションで、久し振りにジェームス・バーダル氏にお逢いした。

昭和四一年、県芸術祭開幕行事「県民吹奏楽」の指揮者としてお招きし一〇〇人の大合奏を感動的にうたいあげたご本人であり、昨日のことのように大変懐しく思い出された。

あれから一〇年、その感激を地方へと県内を回って大分に「吹奏楽フェスティバル」として定着し、はからずも今年度県芸術祭の閉幕行事に「県民吹奏楽大分をうたう」と題して一〇〇人の大合奏を再び実現する運びになった。なにしろ、現在吹奏楽連盟は小・中・高・職場と四〇団体を擁し、その編成について幾多の困難をのりこえての演奏である。本来ならば全団体が参加できる大フェスティバルを実施したい気持ちであるが、場所、時間、経費等の関係でままならず、心ならずも大分中心の演奏になったことを残念に思う。

「閉幕行事を引き受けて」

大分県吹奏楽連盟理事長　糸永信義

今回は標題の「おおいたをうたう」のテーマどおり、大分大学田村洋彦先生にわざわざ作曲を依頼し、意欲的で興味ある作品を書いていただいたことを関係者として厚く御礼申し上げ、そのご努力に深く感謝の意を表したい。

シニアで演奏する高校・職場の皆さんは、九月から新曲にとりかかり、コンクールの疲れをいやすまもなく練習に練習をつぐ毎日、ご苦労です。また、ジュニアの中学校の皆さんは、合同練習の時間もままならずの舞台出演で大変です。しかし、この皆さんのご努力が今後また新しい「県民吹奏楽」への口火となり、県吹奏楽連盟の発展へとつながることを祈念したい。

終わりに、今回出演できなかった佐伯・津久見地区の皆さんが、一一月下旬津久見市民会館で自主演奏会を開催されることになり、協力しあって成功するよう努力されていることをつけ加え、閉幕行事「県民吹奏楽大分をうたう」、「県南地区吹奏楽祭」の成果を期待して筆をおく。

「吹奏楽・大分をうたう」によせて

― 6年ごとに息吹く県の吹奏楽に新しい評価を期待 ―

大分県吹奏楽連盟事務局長　中　野　幸　和

大分県吹奏楽連盟が、本年度「第14回大分県芸術祭」の閉幕行事を担当することになった。Ⅰ部は大分市内の中学生150人編成で「マーチ」「オーバチヤ」「ポップス」「世界のフォーク」など、吹奏楽の楽しさを聞いて戴くことにしているし、Ⅱ部は、別府商業高校他、高校生と職場、一般 100人で「大分地方の俗楽によるファンタジー」（田村洋彦氏芸術祭のための作曲）を演奏することにしている。振り省ってみると47年の第８回芸術祭開幕演奏を、アメリカの世界的指導者ゼームス・バーダル先生を招いて催して以来６年ぶりである。また、その６年前の41年大分国体では780人のブラスバンドで、 国体吹奏楽の任を果たした。丁度６年目ごとに、大きな事業を催してきたことになる。

吹奏楽は、小学校・中学校・高校・大学、さらには職場・一般などに広く編成されているし、これを一つの音楽分野として全国的にみると、最近は特に吹奏楽人口は増加し、また、音楽的水準も非常に高く評価され始めているし作曲家も吹奏楽のためのオリジナル曲を沢山書き、それらがレコード化されて売り出されている。

そんなことで、大分県吹奏楽連盟も、今年の県芸術祭閉幕行事を「県内在住の作曲家」大分大学の田村洋彦先生に作曲委嘱し、その曲を演奏することにした。

田村先生の作曲された曲は「大分地方の俗楽によるファンタジー」と題され、大分県内の民謡などの音の素材をもとに、内面的な大分県民の「心を幻想曲風にうたったもの」だそうである。従って耳馴れた民謡などの節は生で流れてこない。

曲は二章からなり、一章は「醸」と題し、表をおさえ、内に秘めたバイタリテーを画いている。二章は「躍」とし、明日への希望と期待をエネルギッシュに力強く表現している。作曲者の話しによると、現代音楽作曲手法で書かれ、邦楽の尺八や、電子楽器のシンセサイダーも編み込みチャンスオペレーション（不確実音で心情を表わす）や、シアターピース（音を広い空間に配し、会場全体が音楽構成要件となる）など、極めて新しい意欲的な作品であるとのことで、立派な演奏会となるものと期待している。多くの人々のご来聴を戴き、吹奏楽の新しい面を充分評価して欲しいものだと念じている。

佐伯文化会館の　菅　　淳一氏

佐伯文化会館が設立されて7年、佐伯市を中心とする県南文化の振興の母体として、文化振興の事業を幅広く着々と進めてきました。

市、郡民の期待に応え、会館設立の意義の深さを今更のように自覚しています。

文化会館はその使命を果たすために、すぐれた芸術を鑑賞する機会を提供し豊かな情操を涵養する目的と共に、社会教育の場として住民が自から文化的創造活動をするための指導と、その場を提供する目的があります。

菅君は、会館設立の当初から、以上のべた目的の為の企画と運営を担当してきました。

鑑賞の機会を提供する仕事として、自主文化事業では、文化庁移動芸術祭を始め、年間10本の事業で、芸術鑑賞の機運を着々と醸成し、特に、ゲバントハウス四重奏団、スロバキア室内オーケストラ、その他クラシック音楽演奏会の成功で、市民に道を開きました。この成果として、5年前から公民館教室の12教室の中に、市民合唱団、クラシック音楽教室、少年少女合唱団の活動が定着しました。

彼は自からも、親子読書教室の講師として、子どもの良書普及に努力しています。

また、文化振興会を組織し、42団体が現在活動しています。過去の郷土の先人が残した文化の継承と新しい郷土文化の創造を目ざしています。秋の芸術祭では、参加団体の全てが参加し、舞台で郷土の文化、風土を劇化したバラエティショーを演じ好評を得ています。今年は、国木田独歩の佐伯を題材とした作品を、菅君の脚本演出で上演します。

彼は、私的な生活でも人形劇を愛し、25年の活動歴を持ち、その普及に暇を作っては県内を走り回っています。

文化振興の裏方としての菅君、企画・運営から入場券売りまで、職員一同の強力な協力を得て、初めて出来る仕事ですと日頃言っています。籠をかつぐ人、そのまたわらじを作る人とありますが、菅君は、自からそれを実行している裏方さんであり、我が館のホープで私は誇りに思います。

（佐伯文化会館長・大賀基宏）

県民演劇の　十時　良氏

良さんは、私と同じ中学校の美術教師である。大分県中学校美術教育研究会事務局の仕事を一緒にしているが、絵描きとしての彼の水準は比ぶべくもなく高い。自由美術協会会員としての画歴も古く、県美術協会での存在は大きい。

良さんに、私の作品の舞台装置をお願いして六年になる。「沈んだ島の物語」以来だから、県民演劇の誕生以来、私とコンビを組んで、県民演劇の歴史に大きな足跡を残してくれている。装置は照明とともに演劇の生命の半分を支配する。演劇は戯曲と俳優と観客があれば成立つという。演劇の三大要素と呼ぶが、たしかに古代の演劇発生から中世にかけては洋の東西を問わずそうであった。

しかし近代劇の確立の中で、演出の地位が確立され、照明、装置が改革され、劇場が改築された。近代劇を観賞する上で、装置、照明のない舞台芸術はあり得ない。装置家、照明家は近代感覚の乏しい人では駄目なのである。

その点、良さんの感覚は抜群である。彼の舞台装置をみると、詩情があって知的である。人間や世の中の、深い真実を見つめる暖かい目がある。そして造形を追求する現代の科学する目がある。

先日、芸術会館での糸園展を見ながら、美術の基礎になるデッサン力の見事さ、独特の色彩がかもしだす詩的夢幻の世界、そして、寓意性と哲学が、確かな人間を見つめる目としてどの作品にも共通してあった。特に画面の劇的構成と空間処理の見事さに感嘆した。良さんの舞台上の空間処理は見事である。彼は、キャンバスと舞台に正面から向きあって、いまその世界に肉薄しているのだと思う。私の作品への、一作ごとの飛躍は、彼の厳しい精進を象徴しているが、なによりも嬉しいのは、良さんが、すばらしい演劇通であるということだ。

（県民演劇・中沢とおる）

県川柳大会の　疋田青峰氏

疋田青峰さんとの出会は昭和四〇年金池公民館館長の猪股重太郎から私の川柳教室を依頼されて何か月か開いた。猪股氏が退職され、青峰さんが館長を引き継がれた時であったように思う。

青峰さんは大分県の教育職を三七年間（校長一二年）にして退職され、大分市中央公民館長として五年間の活動に幅広く多くの効果実績を残されたのであった。

大分合同新聞の読者文芸の川柳に毎週欠がすことなく投稿を続け、今日に及んでいる。昭和四八年一月に大分合同の川柳年間賞を受賞、又大分県番傘川柳連合会の同人部長として活躍、川柳の普及と新人の指導と育成に惜しみなく力を注ぎ、打込まれた姿は誠に尊い。番傘川柳本社（大阪）の同人にも早々推挙されて毎月佳吟を創作発表されて居られる。

けとばせば石にも意地のある痛さ　　青峰
民族のルーツ地下から文化財
時事放談筒音高く気が晴れる
腥い風ピーポーの音で吹く
公約はファッションショーを見る如し

番傘の中からの青峰さんの句である。青峰さんらしい個性が匂い、川柳とはかくありたいと思う共感の湧く佳吟であると思う。

今年の一月、大分県番傘連合会の幹事長として益々多忙。八月の県の短文学大会には、今年は各ジャンルを代表して川柳部門が世話役として、司会も青峰さんが、討論は田村青丘さん、尾花白風さんで会を結んだ。秋の芸術祭にも幹事長として見事なる采配、団結の会を結んだ。

健康にも恵まれ、円満な人格、いつも若々しく世の川柳の為めに生まれて来たという言葉がぴったりするように思えてならない。

私は常に川柳は私の宿命ですと言っているが、青峰さんをじっと見ていると、二人の人生に川柳との切ることの出来ぬ宿命とご自身でも自負されて居られるのでないかと思うのである。いい意味での手八丁口八丁、又川柳の鬼でもあると思う。

（県川柳大会選者・内藤凡柳）

県立芸術会館の　岡野博文氏

岡野博文氏（国東町出身・36才）。大分県立芸術会館学芸第二課研究員（舞台機構担当）。昭和37年、舞台備品・設備の大道具製作会社で最大手の金井大道具株式会社に入社。

以来、明治座に3年、フジテレビ2年、国立劇場に11年と出向し、通算16年間をプロとしてこの道一すじの経歴をたどってきた。昨年、県立芸術会館の創設にともない、舞台部門の有力メンバーとして帰省ねがった。

本年の県芸術祭開幕行事「日本舞踊」で、タッチバカマに黒の着付で、紺の足袋をはき、舞台を所せましと小走りに動く彼の裏方ぶりには、私どもの目をみはらせる面目躍如たるものがあった。彼の強味は、カシの拍子木でケヤキのツケ板にツケ打ち（拍子木を打って、役者の演技を強調し様式的な動きを印象づける）をし、幕間に柝（き）を鳴らして舞台の進行をはかる狂言方も出来ることである。役者のくせの一つ一つをのみ込んで呼吸（いき）を合わせ、鳴り物に合わせてのツケ打ちの出来る人は、近年まれになりつつあると聞く。裏方には、この外道具方を中心とした内備（うちび一舞台装置）と製作（大道具制作）等の仕事があるが、もともと彼はこうした大道具の出身であり、卒業生でもある。

舞台にかかる緞帳を境に、表方に対する裏方がある。表が（観客席・事務室など）経営に従事するのに対して、裏が（舞台・道具製作場・楽屋など）役者を除いた演出面に従事する道具方、衣裳方・床山（髪を結いあげる）といった、実際に舞台を動かしてゆく、船に例えれば機関室の役割を担当する。

芸術会館は、県民の芸術文化におけるサービスセンターでもある。とくにホール部門は、文芸をはじめ音楽（声楽・器楽・合唱・オペラ・職場音楽・邦楽・民謡）舞踊（日舞・洋舞・民踊）演劇（新劇・歌舞伎・人形劇等々）伝統芸能（人形芝居・文楽等）能楽・生活芸術（華道・茶道等）と多種多様、多目的に使用される。本県芸術文化活動での裏方さん岡野博文氏はますます多忙である。

（大分県立芸術会館学芸第二課長・広瀬良博）

地域文化活動

ひろがりと連帯

杵築市中央公民館長　田中美光

芸術文化活動の振興について考えるとき、まずひとびとの多様な文化的学習要求に対して、いかに答えるか、が公民館経営の重要な課題だと思われる。

言いかえるなら、多様な欲求への対応にこそ、地域文化諸活動育成への、貴重な手がかりがひそんでいるからだ。

ところで、杵築市における文化活動の現状を、公民館事業をとおして眺めるとき、「親子読書講座」や「生活記録学習会」など、ユニークなものから、伝統的な生活芸術（茶道・生花）などをふくめ、三十一種類のジャンルで、七十五の講座や教室を開設し、受講者はいま千五百名を数える。

そして、その指導者のほとんどが、郷土意識とボランティア精神に目ざめた、杵築市民であるのは有難い。

したがって、ひとりの興味や趣味を満足させるに止まりがちな、これら諸活動が、つねにふるさとの明日を展望し、新風土づくりへの、たぎりを見せているのがうれしい。

文芸部門を例にとると、生活記録のメダカグループは、市報の「ふるさと今昔」欄を担当し、郷土の昔と今の風物と心を書き綴り、すでに昨年度、その作品集を自費出版して好評だった。

また、東お母さん読書研究会は、うもれた伝説と民話を掘りおこし、子らに語りつごうと、「お母さん民話集」の発刊準備に追われ、こうした動きを引き金に、市文芸協会では、傘下の俳句・短歌の同人を中心に、文芸誌の刊行を計画中である。

これらは、いずれも、凛とした郷土文化の創造的な活動である。文化の向上には、「質」と「速度」の、二つの条件が必要だというが、私はさらに、「ひろがり」と「連帯」の二つを加え、地域文化振興の指針としたい。

文化ニュース

◦県芸術祭閉幕行事が11月30日（木）県立芸術会館で行なわれます。今年は、大分県吹奏楽連盟による〝吹奏楽大分をうたう〟です。

・昼の部14時、夜の部18時30分から

・入場料は一般1,000円、学生500円

お申し込みは県芸振事務局までどうぞ。

◦九州グラフィックデザイン大分展が、昭和54年2月20日～25日の間、県立芸術会館で開催されます。入場料無料。

なお、本県関係の入賞者は、九州文化協会賞に天野ともお氏（大分市）・大分県知事賞に佐藤邦雄氏（大分市）の両氏でした。応募点数は311点。

◦県芸術祭共催大分県演劇祭が11月23日（木）9時30分から県立芸術会館で開催されます。入場料無料。

出場団体は、県連合青年団の県大会1位チームと、県内高校演劇部の中での優秀4チームが出場します。

＜芸振だより＞

◦県芸術祭の10～11月の間、県芸振の正副会長をはじめ、事務局員はそれぞれ手分けをして7市町村で開かれた、文化祭等の視察に参りました。

◦12月には、県芸振理事会や、県芸術祭賞贈呈式が開催されます。

◦12月に入りますと、県芸振発行の「1978年版大分県文化年鑑」の編集作業にかかります。編集委員・執筆委員をはじめ、関係の皆様の原稿提出については格別の御協力をお願いします。

美術の創造に奉仕して53年

ガクブチ各種
日本画・油えのぐ
デザイン材料

キムラヤ

電話でお気軽に

〒870 大分市府内町三丁目
TEL ㉜ 5056